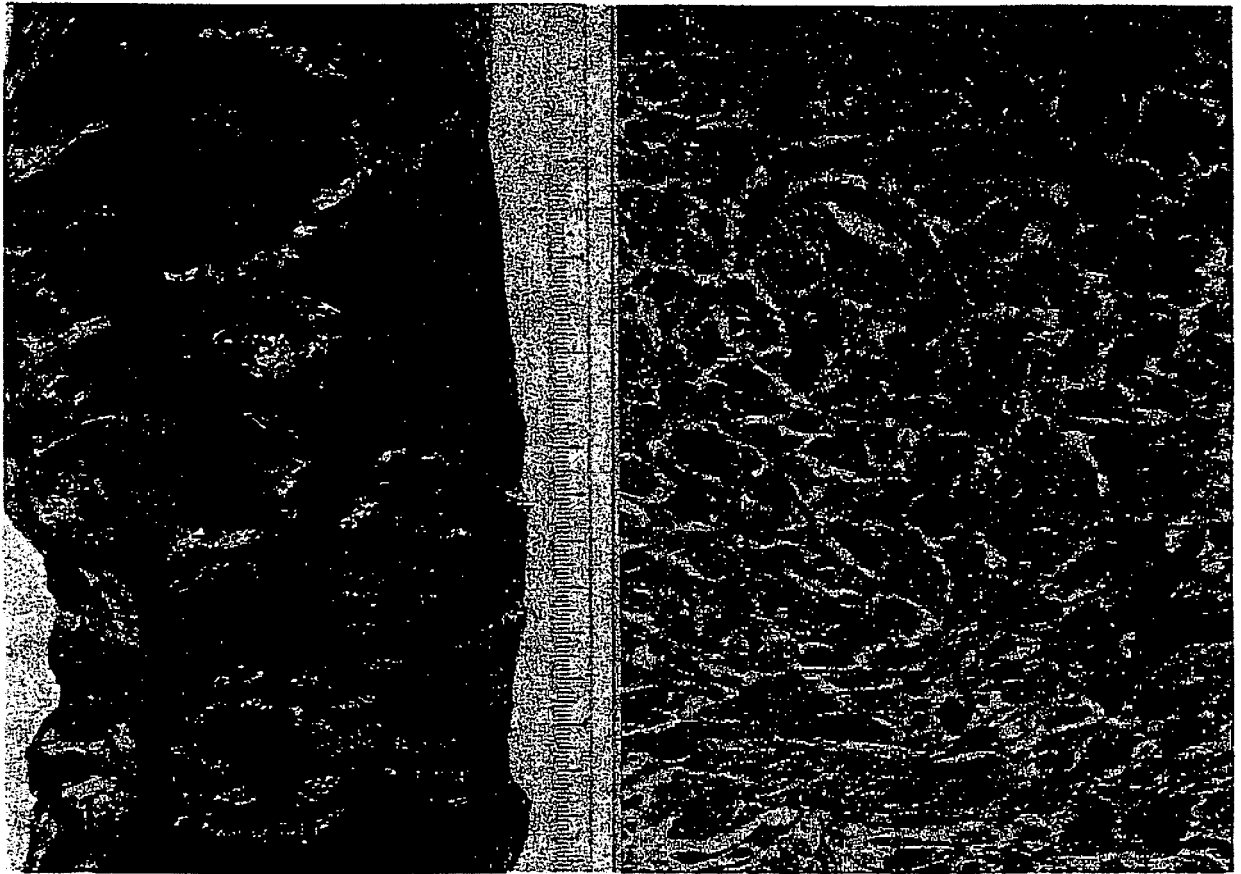


# 馬の回腸

日本大学農獣医学部獣医病理学研究室出題 第25回獣医病理学研修会提出標本No.431



動物：馬，サラブレッド種，雄，5才，鹿毛。

臨床的事項：1979年4月22日生。手根骨骨折の病歴がある他特記事項なし。1984年7月19日放血殺し，剖検に付した。

肉眼的所見：回腸の漿膜面において，小豆大前後の結節状肥厚隆起（厚さ約3mm）が数珠状に不整な円状，半円状，弓状あるいは線状に配列し，腸間膜付着部側から扇状に反対側に広がり，暗赤色～暗黒色を呈していた。結節状肥厚部の内側あるいは腸間膜付着部側の漿膜は線維性に肥厚し，混濁していた（Fig. 1）。かような病変部は回腸において60～70cmの広範囲に及び，盲腸位において病変が回盲腸間膜に達しており索状に肥厚していた。回腸の粘膜面は粘液量がわずかに増加していた。大円虫の腸内寄生は認められなかった。

その他臓器の病理解剖学的所見は上行大動脈起始部と腹大動脈の後部及び前腸間膜動脈の肥厚性動脈炎，三尖弁の軽度な肥厚性炎，肺気腫，肺門リンパ節の炭粉沈着症，軽度な慢性間質性腎炎，胃の馬バエ幼虫症，慢性カタル性胃炎，軽度なカタル性腸炎などであった。

病理組織学的所見：この結節状病変は線維芽細胞，幼若な結合組織細胞及び毛細血管の新生を主とする肉芽組織の部分と陳旧な線維性の部分から成っていた。また，

出血と黄褐色色素の沈着が顕著に起こっていた。結節の表層部は出血が著明に起こり，部位により浮腫性に粗となっていた。黄褐色色素のほとんどのものはヘモジデリンで，ベルリンブルーで青色に染まり，中には陰性に反応する黄褐色の色素も混在していた。そしてヘモジデリンは多数の大食細胞により食食されていた（Fig. 2，HE染色）。

原因としては，成嚙によると小さな血管に血栓症が起こり一種の出血性梗塞を来たしたものであり，一般的にstrongylus属の体内移行する幼虫が原因と考えられている。この症例は結節内に好酸球の浸潤があり，腸粘膜および粘膜下組織においても好酸球の浸潤が認められ著明な部位もあった。このようなことも含めて本症例もstrongylus属の幼虫が原因となっていたものと考えられる。なお，本症例の肉眼的病変が，形態的に小結節の数珠状配列から成っている像は，大変珍しいと思われたのでマクロの写真も掲載した。

診断：研修会において，「回腸血黒症Hemomelasma ilei」と診断された。しかし，この病変は血黒症とするよりも，病理発生を表わすような診断名がよいということで，「大円虫の幼虫によると思われる出血性血鉄素性肉芽性病変」とする意見も出ていた。